

2007 年度事業報告

1. 森林保全プロジェクト

2007 年度は、合計 57,431 本の苗木生産、植樹をおこないました。

1996 年からの 12 年間で、のべ 723,718 本を植樹、約 1,500ha（東京都の渋谷区に匹敵する面積）の森林を再生させました。植樹実績は以下の通りです。

1996 年	49,594 本	2003 年	47,729 本
1997 年	71,703 本	2004 年	51,611 本
1998 年	76,813 本	2005 年	50,463 本
1999 年	72,395 本	2006 年	73,252 本
2000 年	80,341 本	2007 年	57,431 本
2001 年	45,312 本	合 計	723,718 本
2002 年	47,074 本		

※2006 年度、2007 年度の本数は、植林プロジェクト〈キバン-ナンギ地域〉と生活林づくりプロジェクト〈ナルチャン・サリジャ地域〉の合計本数。

1-1. 植林プロジェクト〈キバン-ナンギ地域〉を終了しました

12 年間にわたってつづけてきた、「植林プロジェクト〈キバン-ナンギ地域〉」を、2008 年 3 月をもってすべて終了し、キバン村・ティコット村・アウロ村・ナンギ村の各苗畑を各村にハンドオーバーしました。

終了時事業評価の結果、森林は確実に再生され、今後は、村の森林委員会の指導のもとで、村人みずからが、森林を維持・管理し、計画的に利用していくことができることを確認しました。

村人からの感謝の言葉です。

「ヒマラヤ保全協会の皆さんには、本当に長い間ご支援をいただきましてありがとうございます。ご



ナンギ村の苗畑管理人のモッティさん

ヒマラヤ保全協会の森林保全プロジェクトを長年指導しており、なくてはならないキーパーソンです。



40 年前と現在の比較

写真(上): 約 40 年前のシーカ付近（森林はほとんどすべて伐採されていた）出典：中尾佐助・佐々木高明著『照葉樹林文化と日本』くもん出版、1992 年。

写真(下): 現在（2008 年 4 月）のシーカ付近（森林が再生された）

覧の通り、見事な森林がよみがえりました。

これで、薪、家畜の餌、堆肥、材木が集落のちかくで容易にとれるようになりました。森をつくりながら、同時にそれを利用するといったサイクルができました。また、水源の涵養もでき、農業用水も確保できます。土壌浸食や土砂崩れも少なくなりました。私たちの生活は高度に森林に依存した自給自足生活であるため、森を再生することは生活基盤をつくることに他なりません。

これからは、この森がふたたび後退することのないよう、私たちがしっかり管理し、まもっていきます。住民は、村のルールをまもって、時期と区域を決めて計画的に間伐・枝打ちをおこなうことになっています。また、苗畑は、その役割を十分果たしましたので、規模を大幅に縮小し、必要な分だけを栽培することにします」

1-2. 生活林づくりプロジェクト（第 2 フェーズ）を実施しました

2007 年度の目標を達成しました

2005 年から、ネパール中西部のナルチャン村とサリジャ村ではじめた「生活林づくりプロジェクト」



事業地の位置図

「植林プロジェクト (キバン-ナンギ地域)」は 2008 年 3 月末に終了しました。現在は、「生活林づくりプロジェクト (ナルチャン・サリジャ地域)」を実施中です。また、新プロジェクト候補地 (ベガ地域) の事前調査 (フィールドワーク) をすすめています。

を推進し、その第 2 フェーズを実施、既存苗畑の規模を約 1.5 倍に拡大、苗木の生産能力を向上させました。

苗木は、ナルチャン村では 13,575 本、サリジャ村では 14,160 本、合計 27,735 本をそだてました。植樹は、ナルチャン村では 10,510 本、サリジャ村では 10,376 本、合計 20,886 本を植え、2007 年度の目標を達成しました。

樹種は、ナルチャン村では、マツ (マツ科)、ハンノキ (カバノキ科)、パンユウ (バラ科)、マラータ (薪用)、ポンカン (オレンジ)、シツ (インデアノローズウッド)、トゥーニ (センダン科)、一方のサリジャ村では、マツ (マツ科)、ハンノキ (カバノキ科)、カンニュー (クワ科)、ティムール (ミカン科) などです。

住民が主体になった森林保全活動をすすめました

ヒマラヤの山岳民族は、森林の中に入り込んだ生活をしており、その暮らしは森林資源に高度に依存しています。そこで、単に木々をそだてるだけではなく、地域住民の生活を積極的にうるおす「生活林」をつくりだすことが住民にとって非常に重要です。

「生活林」とは、薪・家畜飼料・食品・薬品・土壌保全機能など、住民が生活していくうえで重要な機能をかねそなえた、住民の最も重要な生活基盤となる森林のことです。具体的には、果樹の育成、森林資源利用のプログラムに積極的に取り組みました。

これにより、森林保全活動に、地域住民が今まで以上に主体的に参加するようになってきました。これは、住民みずからがみずからの森をそだてるといった取り組みであり、住民が主体的に参加しながら、持続的・継続的に自然環境を再生・保全していくプロセスです。ここには、森林再生と森林利用の循環機能が生じ、ヒマラヤ地域の緑化、水源確保、野生動



サリジャ村の女性グループ

完成した織物施設 (イラクサ加工施設) の前にて記念撮影。

物の保護、土砂災害の防止などが促進されて自然環境が保全されるとともに、森林資源の供給により地域住民の生活がうるおうという結果があらわれてきます。

このように、「生活林づくりプロジェクト」によって、住民が主体になった環境保全活動が生まれてきたことにより、ヒマラヤの自然をまもる活動がさらに促進される明るい見通しができました。

紙漉施設と織物施設の建設を開始しました

森林を保全しながら、地域の森林資源を有効に利用して地域を活性化するために、紙漉 (ロクタ紙加工) 施設と織物 (イラクサ加工) 施設の建設をサリジャ村ではじめました。紙漉施設は小屋のみが完成、織物施設は、小屋を建設、既存の 5 台の織機を設置し、機織りができるようにし、織物事業のための基盤をつくりました。

森林資源運搬のための道を建設しました

ナルチャン村で、集落と森林とをむすぶ道を建設し、堆肥や薪などの森林資源の運搬や家畜の移動をやりやすくし、住民の労働を軽減しました。

2. エコ・プロジェクト (ゴミ処理・観光ルート美化)

ネパールでは、ライフスタイルの変化、ツーリストの流入により、様々なゴミが多量に廃棄されるようになってきました。そこで、ヒマラヤ保全協会では、村にゴミ箱を設置し、ゴミ集積場を建設するプロジェクトを長年おこなっています。

2007 年度は、「環境」(エコ) と「観光」(ツーリズム) をキーワードに、トレッキング・ルートであるシーカ〜ガーラ・ルートにおいて実施しました。住民を対象にしたワークショップも開催し、環境教育もすすめました。



ヒマラヤ植林には4つの効果があります

はじめに

ヒマラヤでは、いちじるしい人口増加とともに森林の減少がすすんでいます。それは、ヒマラヤで暮らす人々が、生活（薪や家畜飼料の採取など）のため森林を伐採しなければならないからです。森林が伐採された後には荒廃地がのこり、地域の環境破壊が深刻な問題になっています。

森林を利用し、それを減少（後退）させたのは住民ですが、一方で、住民は森林に依存した生活をしているため、森林が後退することにより住民の生活はくるしくなります。そして住民は、森林伐採を奥地へとさらにすすめ、生活が一層くるしくなるという「悪循環」が生じてしまっています。

そこで、私たちヒマラヤ保全協会は、森林を再生させるとともに、人々の生活を改善することを目的に植林事業を開始しました。

1. 地球温暖化の対策として重要です

今日、地球環境問題として地球温暖化がクローズアップされています。地球温暖化は、温室効果ガス（CO2）の増加によってひきおこされているとされ、その削減が世界的な課題になっています。CO2削減のためには、その排出量を減らすとともに、それを吸収する森林を増やすことが必要です。

このような意味で、森林減少がいちじるしくすすんでいるヒマラヤにおいて植林活動を行うことには大きな意味があり、ヒマラヤの森林は、ヒマラヤだけのものではなく世界へとつながっているのです。ヒマラヤ保全協会は、ヒマラヤ植林が世界でもみとめられるよう努力をつづけています。

2. 自然環境を保全します

地球温暖化対策以外にも、植林活動により様々な効果が生じます。

たとえば、「森林は緑のダム」と言われるように、森林ができると樹木が土地に根をはり、地下水をはぐくみます。ヒマラヤは南アジアの水源として重要であり、森林は、その水資源を涵養するためにはなくてはならないものです。また、雨季の豪雨のとき、樹木の枝葉がクッションとなり雨滴が表土に直接あたらなくなるので、土壌流出をふせぐ効果も生じます。

水資源の涵養、土壌保全のほかにも、動植物の保護による生物多様性の保全、景観の保護など自然環境を保全するための様々な効果が生み出されています。さらに、自然環境の保全は、エコツーリズムの実践といったあらたな価値も生み出しつつあります。

3. 住民に森林資源を供給します

ヒマラヤで暮らす人々は、森林の中に入り込んだ生活をしており、その暮らしは森林資源に高度に依存しています。自然保護だけを目的にするのであれば保護区（保護林）を増やせばよいのですが、それだけだと、ヒマラヤ山村の人々は生活していけなくなってしまいます。

たとえば、ネパール全体で消費する全エネルギーの70%が薪であると言われています。家庭での調理用、暖房用の他、レンガ製造などの工業用熱源として薪は使用されています。また、山間部では放牧する草量が少ないため、樹木の葉を家畜飼料として人力であつめて家畜に食べさせています。つまり、彼らは、薪や家畜飼料を森林から絶えずあつめないと日々の生活が成り立たないという、森林に大きく依存したライフスタイルをもっています。

さらに、森林に溜まる落ち葉はやせた畑の肥料としても活用され、豊かな森林は水をはぐくみ畑に農業用水を供給します。ヒマラヤには「耕して天に至る段々畑」があり、この段々畑を支える基盤が森林なのです。

このように、ヒマラヤの植林活動は、薪・家畜飼料・材木・食品・薬草・堆肥・換金作物・水などの「森林資源」を住民に供給し、住民のもっとも重要な生活基盤をつくることになるのです。

4. 住民の生活を改善します

ヒマラヤの人々は、薪や堆肥、家畜飼料を採取するために長時間の重労働にたずさわることが余儀なくされ、特に女性の健康維持と社会参加、教育を受ける機会の減少など社会的な悪影響が出ています。

植林により、薪やその他の森林資源を豊富に生み出す森林が集落の近くに再生されると、農業の改善とともに、住民の社会生活も改善できます。ヒマラヤ保全協会は、住民の生活基盤となる森林を「生活林」と命名し、単に木を生産するだけではなく、地域住民の生活を積極的に改善する努力をつづけています。

これにより、地域住民が植林活動に主体的に参加するようになってきています。この取り組みは、住民みずからがみずからの森をそだてるといった作業であり、住民が主体的に参加しながら、持続的継続的に自然環境を再生・保全していくプロセスです。

「生活林」は、人手が入ってこそ健全に保たれる森林ですので、住民の主体的参加があつてこそ永続的に森林を保全していくことができるのです。こうして、森林を利用しつつ育てるといふ仕組みができあがれば、森林と住民の循環的関係が構築され、自然と人間が共生していく道をひらいていくことができます。

3. その他の事業

(1) 緊急支援：アウラ村・崖崩れ対策

アウラ村で崖崩れがおり、集落に危険がせまりましたので、防災緊急支援をおこないました。

(2) チベット文化保全（チベット語教育支援）

ネパール国内の少数民族であるチベット人の

子供たちを対象にチベット語教育をおこない、チベット文化保全に貢献しました。

(3) 教育支援（奨学金支給）

ネパール山村僻地の子供たちを育てるために、めぐまれない小学生 53 人に奨学金を支給しました。子供たちは、ノートやペン、教材を買うことができました。

2008 年度事業計画

1. 生活林づくりプロジェクト・第 3 フェーズ

《第 3 フェーズのポイント》

- (1) ナルチャン・サリジャ地域の植林活動を軌道にのせます（目標 2 万 5 千本）。
- (2) 森林資源を有効に活用しながら住民の生活を改善し、環境調和型の生活基盤をつくります。
- (3) ヒマラヤ本来の自然林（原生林）を保全します。

ネパール西部のミャグディ郡およびバルバット郡のナルチャン・サリジャ地域において、森林を再生し自然環境を保全するとともに、地域社会を活性化させることを目的として、2005 年に建設した苗畑の運営を強化し、植林地への植樹活動を軌道にのせるとともに、地域の森林資源を有効に利用して、紙漉（ロクタ紙加工）施設と織物（イラクサ加工）施設を整備し、住民の収入向上計画をすすめます。昨年度までの成果を踏まえ今年度は、住民と森林の循環的関係の基礎をつくります。

2. エコ・プロジェクト（ゴミ処理・観光ルート美化）

ネパール西部のミャグディ郡において、ゴミ箱およびゴミ集積場を建設し、環境教育を実施することにより、地域の環境保全とトレッキングルート美化をすすめ、地域の環境と住民の健康をまもるとともに、観光資源の破壊をくいとめ、環境調和型の観光（エコツーリズム）開発をめざします。今年度は、温泉で有名なタトパニ村と、そのすぐ近くで風光明媚なナルチャン村において実施します。特にタトパニは多くのトレッカーが滞在することもあり、ゴミの増加は深刻な問題になっています。キーワードは「環境」（エコ）と「観光」（ツーリズム）であり、ネパールのエコツーリズムの発展を展望しながら、ヒマラヤ保全協会の「エコ・プログラム」として継続的に今後とりくんでいきます。

3. 新規 3 カ年計画の立案

2009 年度からはじめる新規 3 カ年計画を立案するために、新プロジェクト候補地（ベガ村、ドバ村、ラク村など）のフィールドワーク（現地調査）をおこないます。年度末には新しい計画を立案します。

4. その他の事業

教育支援プログラム：ネパールのめぐまれない子供たちを育成するために奨学金を支給します。

保健衛生プログラム：15～30 歳の人々を対象に、HIV/AIDS 保健衛生プログラムを実施します。

特定非営利活動法人ヒマラヤ保全協会 2007 年度事業報告 & 2008 年度事業計画

2008 年 7 月 26 日発行

編集・発行所 特定非営利活動法人ヒマラヤ保全協会

〒151-0053 東京都渋谷区代々木 3-5-7 シグマロイヤルハイツ 403

TEL/FAX: 03-5350-8458 E-mail: ihc-jpn@ybb.ne.jp <http://www.ihc-japan.org>